Japan Society of Obstetrics and Gynecology

127　喘息合併妊娠70例の臨床的検討

都立広尾病院
海老澤　寛、早川康仁、飯塚貞男

〔目的〕喘息は、増加傾向に有、最近は成人で、3～4％の有症率であるとされる。又治療法も、ステロイド吸入薬等、抗炎症療法が主体となった。妊娠合併例も増加が予想され、喘息合併妊娠について、検討を加えた。

〔方法〕1985～1994年の10年間に、当院にて分娩した5,292件のうち、喘息合併妊娠70例（1.3％）について、妊娠中悪化群(a)－17例(24.3％)、不変群(b)－26例(37.1％)、改善群(c)－14例(20％)、小児喘息群(d)－13例(18.6％)に分け、周産期諸因子につき検討した。

〔成績〕(a群、b群、c群、d群)で、児の在胎週数、出生体重、apgar scoreは、(38.8, 40.1, 40.1, 39.4)週、(3,000, 3,110, 3,120, 3090)g、(8.9, 8.9, 9.1, 8.9)で、経腟分娩時出血量、分娩所要時間にも差はなかった。母体体格について、妊娠前体重、妊娠中体重増加、分娩時Kaup指数をみると、(53.7, 52.0, 52.9, 49.8)kg、(10.5, 11.3, 11.4, 10.6)kg、(25.0, 25.9, 25.6, 24.3)で、傾向はなかった。切迫早産は、70例中、17例(24％)にみられ、対照(17％)に比し高率で、a群で多くみられた。誘発・促進は、(55.3, 38.5, 64.3, 46.1)％と対照(24％)に比し高く施行された。帝切は、11例(15.7％)に施行され、a群で23.5％と高率であった。妊娠中治療例は、28例で、キサンチン誘導体－18例、ステロイド療法－10例で、両者間に傾向はみられなかった。

〔結論〕喘息合併妊娠は、当院でも、増加傾向にあり、悪化、不変、改善(群)は、ほぼ1:1.5:1で誘発・促進率、帝切率、切迫早産合併が、悪化群で、高率であった。最近は、ステロイド吸入薬が、治療の主体となり、改善群の増加、悪化群の減少がみられる。

128　妊娠中に原発性副甲状腺機能亢進症が診断された双胎の一例

焼津市立総合病院
荷見よう子，平岡邦彦，北村公也，成高和稔，松岡　良

妊娠中に原発性副甲状腺機能亢進症が診断された双胎の一例を経験したので報告する。

症例は21歳、0経妊0経産。他医で妊娠経過観察され、妊娠12週から15週まで重症妊娠悪阻にて輸液療法をうけた。同時期から嗄声を認めた。妊娠15週で双胎と診断され、妊娠23週から当科で妊婦検診を行っていた。妊娠28週から双胎管理のため入院となり、切迫早産に対して子宮収縮抑制剤を投与された。入院時血清尿酸9.1mg/dlと高値、クレアチニンクリアランス37ml/min、尿中NAG 16.0U/l、尿中β_2MG 9780μg/l、また血清カルシウム(Ca)12.6mg/dlと高値、血清リン2.3mg/dlと低値であった。副甲状腺機能亢進症を疑い、精査したところ、インタクトPTH 220 pg/mlと高値であり、原発性副甲状腺機能亢進症と診断された。妊娠31週5日から血圧上昇、浮腫出現と妊娠中毒症を認め、妊娠32週0日に血清Ca 15.2mg/dl、胎児仮死にて腹式深部帝王切開術を施行。第1児1548gの男児、第2児1366gの男児、と生児を得た。第1児は日令1日に血清Ca 6.8mg/dlと低値を示し、日令5日までグルコン酸カルシウムを投与された。第2児は日令3日に血清Ca 6.6mg/dlと低値を示し、日令5日までグルコン酸カルシウムを投与された。術後、輸液療法及び合成カルシトニン誘導体投与で高カルシウム血症の治療を行い、頸部の精査を施行したところ、CT及び超音波検査上、左上上皮小体腺腫が認められた。術後22日目に左上上皮小体摘出術を施行し、13×20mmの左上上皮小体を摘出した。

NII-Electronic Library Service